



マッチング・レジストレーション

1

講義内容

- マッチング(位置合わせ)の評価関数
 - 相互相関(正規化相互相関)
 - 2乗誤差
- オプティカルフロー

相関演算

相関演算は以下の式で定義される。

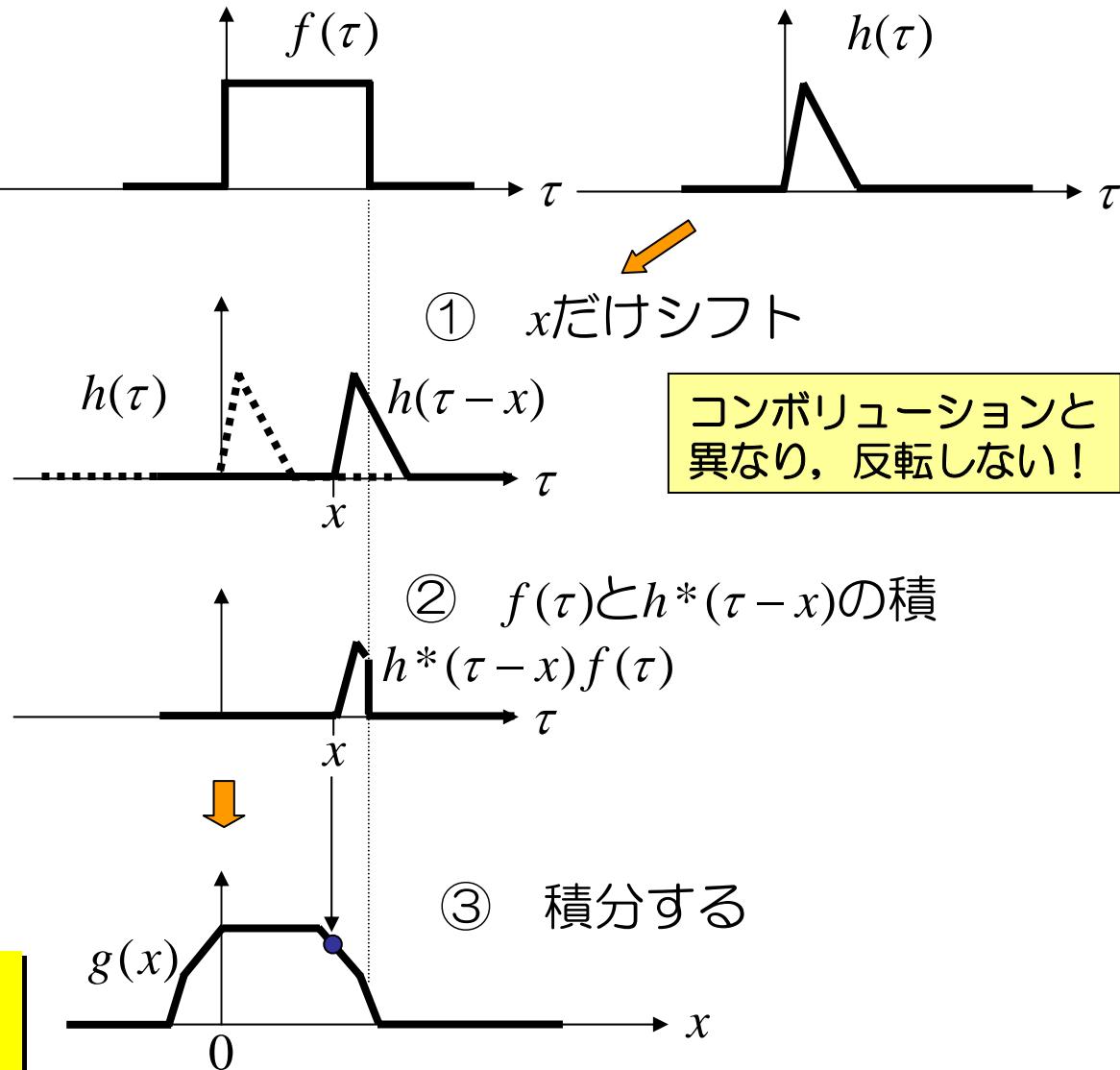
$$g(x) = \int_{-\infty}^{\infty} h^*(\tau - x) f(\tau) d\tau \\ = h^*(x) \otimes f(x)$$

$g(x)$ を相関関数と呼ぶ。
(*印は複素共役を意味する)

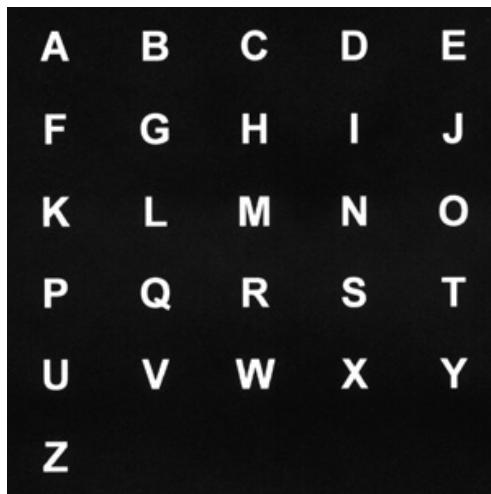
$h(x)$ が実関数なら

$$g(x) = \int_{-\infty}^{\infty} h(\tau - x) f(\tau) d\tau \\ = h(x) \otimes f(x)$$

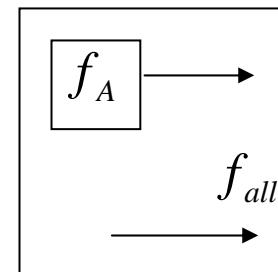
パターンマッチング、対応領域の検出などに利用される。



文字検出実験



A



左の画像の中から、上の文字 “A” を
相関演算を用いて探す。



2次元の相関演算

$$\begin{aligned}
 g(x, y) &= \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f_A(\xi - x, \eta - y) f_{all}(\xi, \eta) d\xi d\eta \\
 &= f_A(x, y) \otimes f_{all}(x, y)
 \end{aligned}$$





正規化相互相関によるマッチング

相互相関(実関数の場合)を離散系で再定義:

$$I(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} f_A(\xi - x, \eta - y) f_B(\xi, \eta)$$

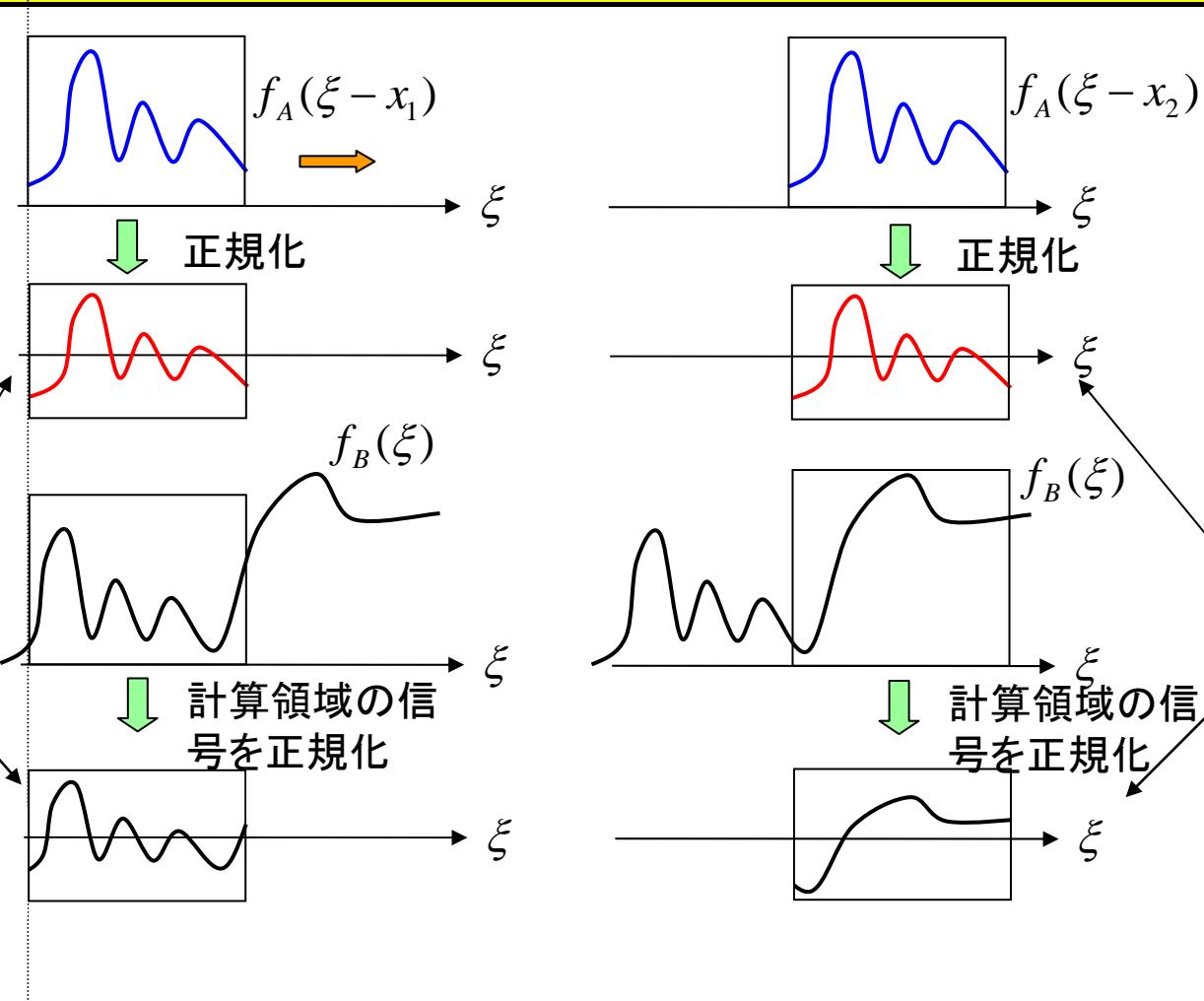
正規化相互相関(NCC: normalized cross correlation):

$$\begin{aligned} I_{NCC}(x, y) &= \frac{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)(f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)}{\sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)^2} \sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)^2}} \\ &= \sum \frac{(f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)}{\sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)^2}} \cdot \frac{(f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)}{\sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)^2}} \\ &\equiv \sum f_A^{(N)}(\xi - x, \eta - y) \cdot f_B^{(N)}(\xi, \eta) \quad \text{表現の定義} \end{aligned}$$

各計算領域において、平均画素値を引き、標準偏差で割った
画像に対して相関の計算を行う。

正規化の効果

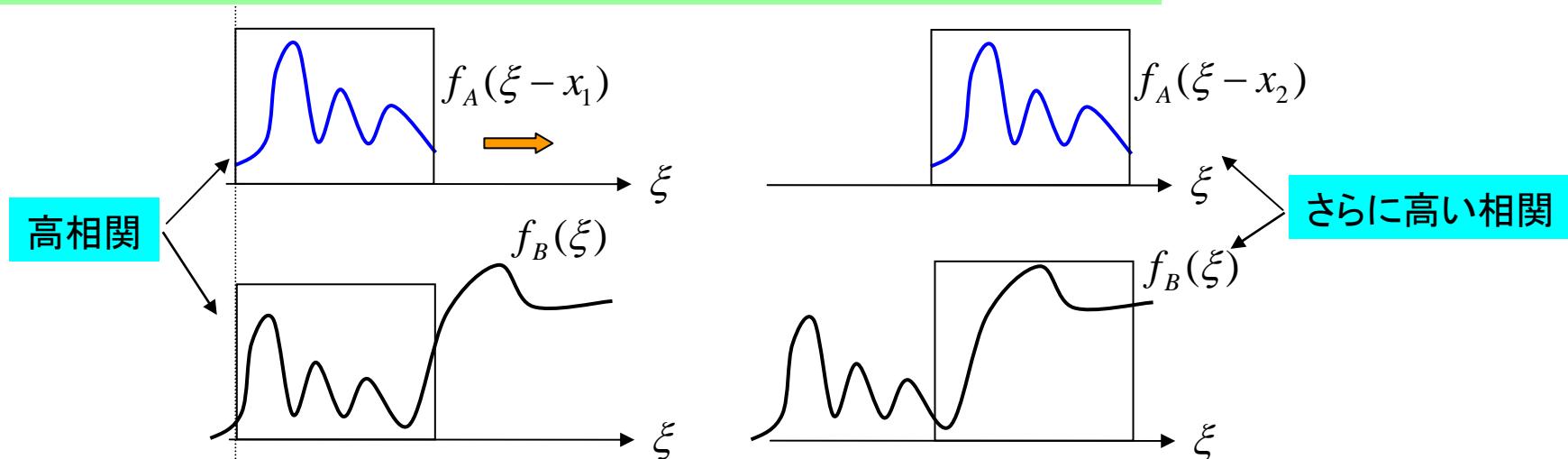
$$I_{NCC}(x, y) = \frac{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)(f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)}{\sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_A(\xi - x, \eta - y) - \bar{f}_A)^2} \sqrt{\sum_{\xi, \eta \in R} (f_B(\xi, \eta) - \bar{f}_B)^2}}$$



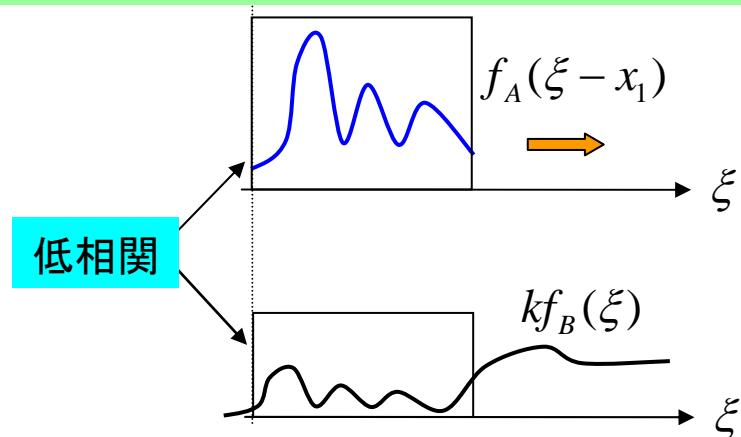
単なる相互相関を用いた場合の問題点

$$I(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} f_A(\xi - x, \eta - y) f_B(\xi, \eta)$$

もともと濃淡パターンの一致していない部分でも高相関を与える場合がある



一方の画像の輝度が全体的に高くなる(低くなる)など変化してしまった場合に不正確となる

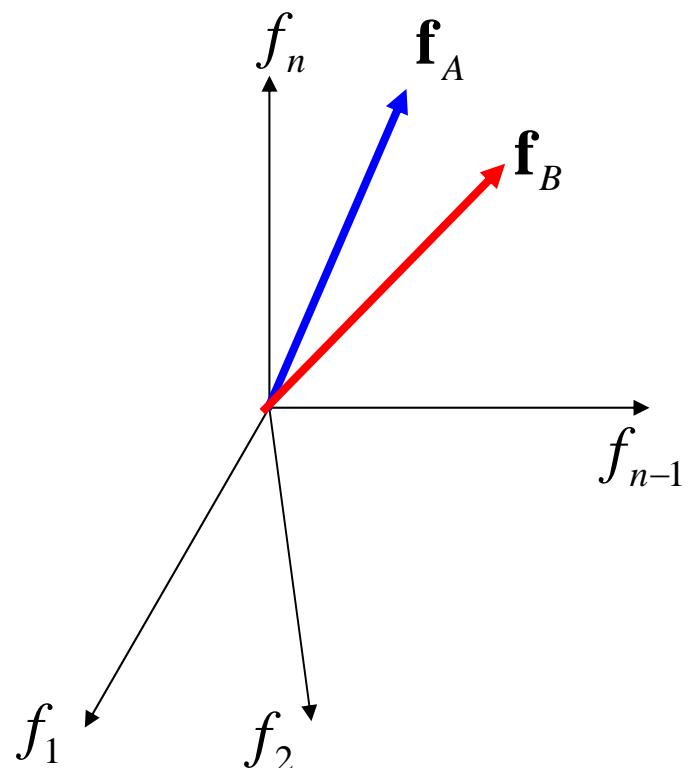


相互相關のベクトル的解釈

$$I(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} f_A(\xi - x, \eta - y) f_B(\xi, \eta)$$

$$\begin{array}{ccc} \{f_A(\xi - x, \eta - y), |(\xi, \eta) \in R\} & & \{f_B(\xi, \eta), |(\xi, \eta) \in R\} \\ \Downarrow & \text{1列に並べる} & \Downarrow \\ & & \text{1列に並べる} \end{array}$$

$$\mathbf{f}_A = [f_{A,1} \quad f_{A,2} \quad \cdots \quad f_{A,n}] \quad \mathbf{f}_B = [f_{B,1} \quad f_{B,2} \quad \cdots \quad f_{B,n}]$$



$I(x, y)$ はベクトルの内積演算に相当する。



正規化相互相關のベクトル的解釈



正規化相互相関は

$$g(x) = a \cdot f(x) + b, \quad a, b \text{ はある定数.}$$

で表される信号変動に対して頑健なマッチングが可能.

2乗誤差と相関演算との関係

相互相関(離散系)

$$I(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} f_A(\xi - x, \eta - y) f_B(\xi, \eta)$$

2乗誤差の総和

$$D(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} \{f_A(\xi - x, \eta - y) - f_B(\xi, \eta)\}^2$$

正規化相互相関(離散系)

$$I^{(N)}(x, y) = \sum_{\xi, \eta \in R} f_A^{(N)}(\xi - x, \eta - y) f_B^{(N)}(\xi, \eta)$$

2乗誤差の総和

$$\begin{aligned} D(x, y) &= \sum_{\xi, \eta \in R} \{f_A(\xi - x, \eta - y) - f_B(\xi, \eta)\}^2 \\ &= \sum_{\xi, \eta \in R} \{f_A(\xi - x, \eta - y)\}^2 \\ &\quad + \sum_{\xi, \eta \in R} \{f_B(\xi - x, \eta - y)\}^2 \\ &\quad - 2 \sum_{\xi, \eta \in R} f_B(\xi - x, \eta - y) f_B(\xi, \eta) \end{aligned}$$



マッチング・レジストレーション

11

講義内容

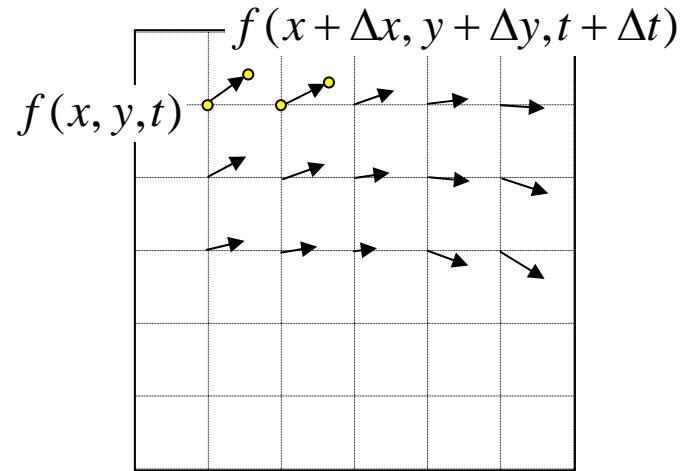
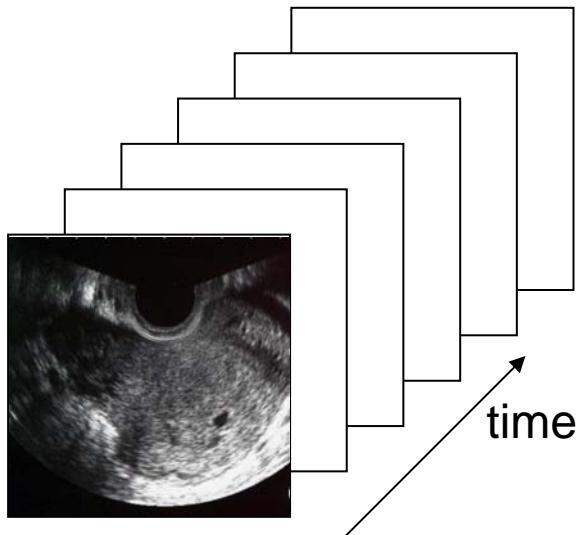
- マッチング(位置合わせ)の評価関数
 - 相互相関(正規化相互相関)
 - 2乗誤差
- オプティカルフロー

オプティカルフロー

勾配法：被写体の動きを動画像の時空間微分から推定するための方法

特徴：

対応点（特徴点）の検出を行うことなしに、各局所領域の移動先を求める。



欠点

次のような場合には精度が悪い

- ・濃度変化の少ない被写体
- ・急激な濃度変化のある被写体（エッジ部分など）

オプティカルフローの原理

1次元での説明

- 仮定**
- 物体上の点の明るさは移動後も変化しない。
 - 画素値の空間的な変化は緩やかである。

仮定1より、

$$f(x, t) = f(x + \Delta x, t + \Delta t)$$

右辺をテイラー展開すると

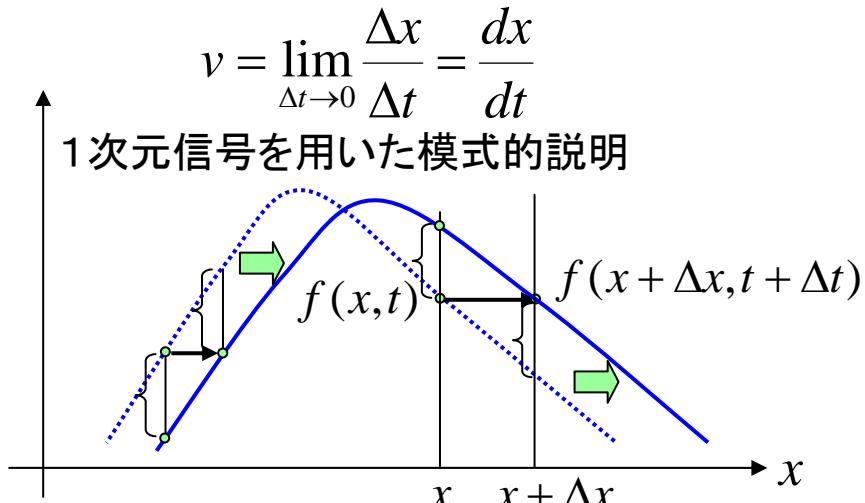
$$f(x + \Delta x, t + \Delta t) = f(x, t) + \frac{\partial f}{\partial x} \Delta x + \frac{\partial f}{\partial t} \Delta t + \varepsilon$$

ここで ε は高次の項であるがこれを無視し、両辺を Δt で割り、 $\Delta t \rightarrow 0$ とすると

$$\frac{\partial f}{\partial x} v + f_t = 0 \quad \text{ただし} \quad v = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{\Delta x}{\Delta t} = \frac{dx}{dt}$$

ここで、
 $\begin{cases} \frac{\partial f}{\partial x} : \text{位置 } x \text{ での画素値の微係数} \\ f_t : \text{位置 } x \text{ での画素値の時間変化量} \end{cases}$

であり、動画像より算出可能である。これを用いて上方程式を解けば、 v が得られる。



注目画素近傍の小領域内各点でオプティカルフロー v が等しいと仮定できるなら、以下の式を満たす v を回帰分析により求める方が安定している。

$$\sum_{r \in R} \left[\frac{\partial}{\partial x} f(x, t)v + \frac{\partial}{\partial t} f(x, t) \right]^2 \rightarrow \min.$$

オプティカルフローの原理

2次元での説明

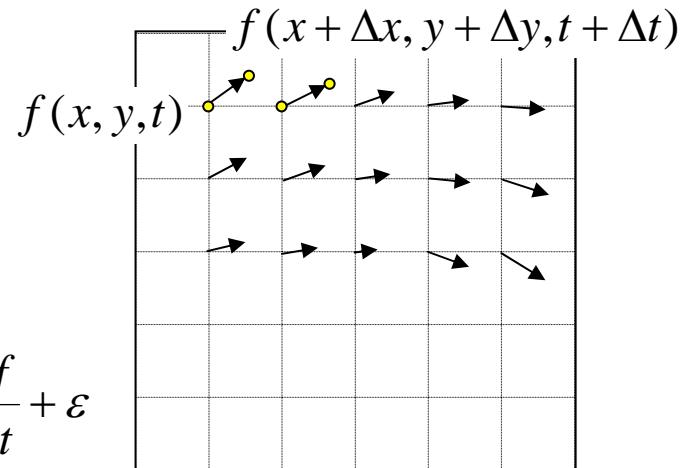
- 仮定**
1. 物体上の点の明るさは移動後も変化しない。
 2. 画素値の空間的な変化は緩やかである。

仮定1より、

$$f(x, y, t) = f(x + \Delta x, y + \Delta y, t + \Delta t)$$

右辺をテイラー展開すると

$$f(x + \Delta x, y + \Delta y, t + \Delta t) = f(x, y, t) + \Delta x \frac{\partial f}{\partial x} + \Delta y \frac{\partial f}{\partial y} + \Delta t \frac{\partial f}{\partial t} + \varepsilon$$



ここで ε は高次の項であるがこれを無視し、両辺を Δt で割り、 $\Delta t \rightarrow 0$ とすると

$$\begin{bmatrix} \frac{\partial f}{\partial x} & \frac{\partial f}{\partial y} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u \\ v \end{bmatrix} + f_t = (\nabla f)^t \mathbf{u} + f_t = 0 \quad \text{ここで } \mathbf{u} = \begin{bmatrix} u \\ v \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} dx/dt \\ dy/dt \end{bmatrix}$$

ここで求めたいのは変位ベクトル \mathbf{u} であり、 f の x や y での偏微分はその位置での差分、また f_t は位置 (x, y) でのフレーム間差分により得られる。実際には、注目画素位置の近傍の小領域 R で、以下の式を満たす \mathbf{u} を回帰分析により求める方法が考えられる。

$$E = \sum_{r \in R} ((\nabla f)^t \mathbf{u} + f_t)^2$$

3次元の場合も同様に考え方で変位ベクトルが求まる。